

サウジ経済を陰で支える外国人番頭達

大住政孝

「エネ研」と「日本・サウジアラビア産業協力」(中東協力センター)の二足の草鞋を履いて働いている私にとって、仕事柄サウジに出掛ける機会が多い。昨年 9 月 15 日の「リーマン・ショック」に端を発した世界金融危機の影響が、東部州の財閥 Al-Gosaibi、SAAD 両グループの破綻など民間部門、個人には多少は残っているものの原油価格の堅調さにも支えられ、サウジ経済は比較的安定している。今回はこのサウジ経済を陰で昔から支えてきた外国人番頭達のことについて少し触れてみたい。

サウジの役所、会社のトップ、オーナーはサウジ人が占めるのは当然としても、これを支える番頭役の役員、顧問にはアラビア語が話せる他中近東諸国の人間が多い。

世界的に有名なゼネコン系大財閥 Saudi Bin Ladin グループのサルキシアン氏(Sarkissian)はアルメニア系レバノン人でベイルートからジェッダに移って 20 年以上になる。因みにアルメニア人の名前には「アン」が付くことが多い。日本語の「さん」に相当するらしい。「ミスター5%」の石油王グルベンキアン、旧ソ連の外相ミコヤン、「剣の舞」の音楽家ハチャトリアン、ロッキード事件のコーチャンなど枚挙に暇がない。私が 1970 年代初め、商社よりテヘラン大学に留学した際の大家がアコピアンさんというアルメニア人であったことも思い出される。

海外ブランド商品を多く扱う財閥 Olayan グループのラハフド氏(Lahhud)は 1999 年から同じくベイルートからリヤドに移り、現在は副社長を務めている。

ユニチャーム製品の生産・販売会社 Gulf Hygienic のカトベ氏(Katbeh)は 10 年前は常務であったが、海外にも販路を広げることに成功し、現在では社長を務める。

これら 3 人の故国はレバノンである。レバノンは内戦(1975 年)以降国外に流出する国民が増加した。現在国内には 400 万人の人口しかいないのに対し、国外には 1,600 万人もいるといわれている。ユダヤ人、アルメニア人に似た運命を辿っているとも云える。商売に長けたフェニキア人の末裔でもあり海外の経済界で活躍している人が多い。世界的資産家である Kingdom Holding のワーリド・ビン・タラール王子(Waleed bin Talal)も母はレバノン人である。

異色なところでは、MA'ADEN(Saudi Arabian Mining Company)のハジャヴィ氏(Khajavi)がいる。彼はイラン人で、革命(1979 年)後、米国に渡りヒューストンで BECHTEL 社に就職、後に同社が開発を手掛けたサウジ王立委員会(Royal Commission)のジュベールに移り、Olayan グループなどを経て現在は MA'ADEN の社長顧問を務めている。

これら私の知っているサウジで成功した外国人番頭達に共通する生活哲学は、「資産に恵まれても土地や株にのめり込むことは避け、教育、健康に優先的に投資する」ことである。かれらの故国の歴史(政変、外国や他民族との抗争で資産を没収された辛い歴史)がこのような教訓を生んだのであろうか。

(了)